

# 新 日本語の現場

＊206＊

民放で連続ドラマの紹介番組などを見ていると、若手アナウンサーが高低や強弱をつけずに「ドラマ」と発音していることが多い。教本では、「ド」にアクセントを置くことになっているのだが――。

若い世代で、言葉に抑揚をつけない話し方をする人が増えている。「わたしの彼氏」と言う場合も、彼氏の「カ」

にアクセントをつけず、単調に流してしまふ女性が少なくない。この言い方は、

話し言葉の専門家であるアナウンサーにも伝染している。

十歳代前半以下に限れば過半数。そのため、改訂版ではドラムをはじめ、モデル、ボードなど七十一の外来語に關し、平板な発音も認めた。なぜ抑揚のない言い方が広がるのか。定説こそないが、東大の酒井邦嘉・助教授(39)

## アクセントに妙味あり

NHK放送文化研究所では一九九八年の「日本語発音アクセント辞典」改訂に際し、六百人のアナウンサーに調査を行った。例えば「ドラム」を平板に発音すると答えたのは全体で四割弱だったが、三

(言語脳科学)は「若い女性や、同じグループ内などで、ちょっと違う感じの話し方を共有してみたいという文化的な要因が働いているのでは」と推しはかる。「どんな女性も母親になれば、赤ちゃんに

は一語一語はつきり言葉に抑揚をつけながら、ゆっくり話しかけるようになるでしょう。平板化が言葉全体に及ぶとは思えません」

これに対し、元NHKアナの森本毅郎さん(64)は平板化を危ぶんでいる。「『妙味が

あるねえ』と言うとき『ミヨ』を強めて際立たせれば、感動や感情の起伏まで伝えられる。その言葉が、ポツと立つ感じ。それがなければ言葉の香りも薄くなります」  
放送に期待されるのは、味のある言葉遣い。森本さんの心配もうなずける。